

教科教育観の転換を促す教職実践演習の試み

石田 靖弘

A Practical Teaching Training Method to Promote the Change in Students' Pedagogical Belief for Subject Teaching

Yasuhiro Ishida

1. はじめに

4月から教職に就く多くの学生が抱いている次のような心配事がある。

- ・学級で起こる様々な問題や学級がうまく機能しない状況、いわゆる“学級崩壊”
- ・学力向上の期待に応えることへの責任

前者は、学級経営に関することであり、後者は授業づくりに関することである。学生との対話の中で、気づくことは、彼らの多くは、学級経営と授業づくりを別々に考えているということである。すなわち、

- ・学級経営は、授業の土台である。学級経営がうまくいかないと、授業は成立しない。
- ・学級経営と授業は両輪である。

というものである。一方、教育の現場には、「教師は、授業で勝負する」という言葉がある。これは、授業を通して子供を育てるという実践であり、授業と学級経営は一体のものという感覚である。

本報告は、本学学生の授業づくりに対する「学級経営の土台の上に授業が成立する」という教科教育観を「教師は授業で勝負する」という教科教育観に転換することを意図して行った、教職実践演習での取り組みをまとめたものである。

2. 問題の所在及び主題設定の理由

「教師は授業で勝負する」という言葉を問いの形に変換してみると「教師が行う〇〇科の授業という実践の中で、子供たちの人間性を育む(=子供を育てる)ことができるのだろうか」となる。この問いの答えがもしも「否」であるならば、授業という営みは、単なる知識・技能の取得のための手続きとなり、学校に来て学ぶ意味も消滅するであろう。現代及び未来社会は、知識・技能を習得するだけならば、学校でなくてもできる時代だからである。この点について、「教育課程企画特別部会論点整理(案)H27.8.20」では、子供たちに育成すべき

資質・能力として次のように述べられている。

—資質・能力の要素¹⁾—

- i) 何を知っているか、何ができるか。(個別の知識・技能)
- ii) 知っていること、できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力)
- iii) どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。(学びに向かう力、人間性)

更にiii)については、以下のような解説が付記されている。

—論点整理2-(2)-①より引用—

上記のi)及びii)の資質・能力をどのような方向性で働かせていくかを決定づける重要な要素であり、以下のような情意や態度等に関わるものが含まれる。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
- ・多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさ思いやりなど、人間性に関するもの。

こうした資質・能力については、学習指導要領等を踏まえつつ、各学校が編成する教育課程の中で、各学校の教育目標とともに、育成する資質・能力のより具体的な姿を明らかにしていくことが重要である。

要素iii)に含まれるものは、まさに学級経営の内容そのものである。これまで、この要素iii)は、学校教育法第30条の2項で「学習意欲」とのみ示されていた。今回これを、育成すべき資質・能力として取り上げ、更に「学びに向かう力や人間性」として整理したことは、iii)を授業の中で育成されるものとして明示したと言える。

これらのことから、次期学習指導要領が求める新しい教師像は、i) ii) iii)を授業の中で統合できる力量を有する「授業で勝負する教師」であると考えられる。

そこで、教職実践演習で、学生の教科教育観の転換を図り、i) ii)と同時にiii)を具体的な教師・児童の姿

として描き出すことに焦点を当てた講義・演習の必要性を感じ、本主題を設定した。なお、以下本報告においては、育成すべき資質・能力の三要素 i) ii) iii) を同時に実現する授業のことを、「新しい教科教育観」に立った授業と呼ぶことにする。また、iii) に示された内容を「人間性の育成」と捉えることにする。

3. 学生のもつ新しい教科教育観の実態

本学学生の教科教育観を探るために、教職実践演習の受講生に対して、質問紙により、下記のアンケートを実施した。

○実施日時 平成27年10月21日

○対象

小学校教員免許取得希望の大学4年生30名

○質問内容

「教科の授業は、学級経営、人間関係づくり、人間性の育成等に強く寄与するものである。」という考えについて、大学での学修や教育実習、学生サポーター等の今までの経験を踏まえて、あなたの正直な気持ちを聞かせてください。

○選択肢

- 1 教科の目的は別である。
- 2 問いの内容は、授業成立のための土台である。
- 3 教科の授業と問いの内容は両輪である。
- 4 問いの内容について、そう思うが、具体的には、どういうこと分らない。
- 5 教科の授業で、問いにあるような子供の姿を実現することができる。

○回答手続き

上記の選択肢より一つを選択させ、その内容について、自由記述をさせる。

○結果

選択肢毎の人数と特徴的な記述を表1に示す。また、選択肢については、学級経営を教科内容の獲得と分離して考えているかどうかを基準として、1～3を「A：学級経営重視型」、4と5を「B：教科教育重視型」として分類した。

表1：学生のもつ教科教育観（実態）N=30

型	人数	特徴的記述やキーワード
A	18	<ul style="list-style-type: none"> ・本当の人間関係や優しさとは別のもの ・教科外の活動や行事の重要性 ・主は学級経営や人間関係⇒教科の基盤 ・学級経営が子供の姿で授業に現れる ・相互作用で高まっていく ・学級の雰囲気や学ぼうとする力の源 ・学級経営が上手な先生は授業もうまい
B	12	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では大半が授業の時間 ・授業の中に、規律・訓練、学び合い、理解、質問、意見交流、協働、共感がある。⇒学級経営

結果は、次の通りである。

- ・半数以上の学生が、A型の教科教育観を保有している。一方、B型の学生のほとんどは、選択肢4の「具体的にはどうすればいいのかわからない。」を選んでいる。
- ・A型・B型のどちらの学生も学級経営も授業も両方大事であると答えている。
- ・A型の学生の記述の中に、授業内容と結びついた具体的な活動や、授業内容の理解にかかわっての子供の交流の姿はあまり描かれていない。

4. 新しい教科教育観に関わる文献

教科教育の中で学級経営を行う視点は、学生の記述に見られるように、活動の中での子供の学びの姿を教師が適宜に捉えて学級経営に繋げていくといった、いわば名人芸的な部分がある。従って学生が、教科教育の授業と学級経営を一体化したものと捉えづらひのはもったもなことである。この点について小学校学習指導要領理科編（1999）の中では、理科固有の学び方である問題解決とそこで育つ人間性について次のように記述されている。

—学習指導要領²⁾の記述より—

児童が見通しをもつことは、次の意義を含意する。

- ・自己責任の感覚
- ・自分の考えを絶えず見直し、行動を改善する態度
- ・自然の特性は、人間の創造物であるという考え方の獲得

学習指導要領では、理科固有の問題解決という授業方法の中で、児童に観察・実験の見通しをもたせることを通して、「自己責任、自己の見つめ直しと行動改善、創造性」を育むことができると述べられている。そして、この考え方は、2008年版の学習指導要領にも受け継がれている。しかし、この20年間に小学校現場での研究発表会等で具体的な教師のかかわりや児童の姿として人間性の育成が示され、提案された例は、残念ながらほとんど見当たらない。

そこで、以上のことを次期学習指導要領の方向性と合わせて勘案すると、これからは、理科だけではなく、教科固有に獲得される知とその知の獲得を目指した学びの中で、どのような人間性が育成されるのかを、単元を通して具体的に明らかにする必要があると考える。

5. 目的と解決の方途及び分析

○目的

学生の教科教育に対する意識を以下に示す「新しい教

科教育観」に変える。

—新しい教科教育観—

教科教育の本質とは、教科で獲得を目指すものとその獲得過程において育成される人間性とから成り立ち、それらを同時に実現するための具体的な授業を行うことである。

○方途

教職実践演習の担当授業回数3回の授業を使い、以下の点からの講義・演習を行う。

- ・次期学習指導要領の改訂に向けての教育課程特別部会論点整理（案）の要約と解説
 - ・各教科の存立基盤の確認
 - ・教科で獲得を目指す教科固有の内容の確認
 - ・教科固有の学び方の中で育成される人間性の特定
 - ・人間性が育まれる具体的な授業場面の想定とその場面での教師の関わりや児童の具体的な姿の描き出し
- 講義・演習の各時間のねらいと内容は表2の通りである。（次ページ）

○分析

最終レポートで、「人間性の育成」に関わる具体的な授業場面の想定と「新しい教科教育観」についての記述を分析する。

6. 学生の変容と考察

（1）学生が想定した教科ごとの人間性

学生は、第2時で最終レポートを書くための教科を選択している。選択した教科の中で育成されるその教科固有の人間性に関する記述を教科ごとにまとめたものが表3である。なお、表中に取り上げた言葉は、以下の観点から抽出している。

- ・「学び合いの力」「共に問題を解決する力」などの記述に関しては、教科固有のものではなく、また、内容獲得との関係が不明確であるため取り上げていない。（学生の多くは、このような力をつけることを目指した活動を仕組むことが授業における人間性の育成であり学級経営であると誤解をしている。）
- ・「協調性」や「他者理解」など、どの教科でも考えることのできる記述に関しては、教科固有の意味や教科固有の具体的な教師と児童のかかわりが記述されていないものは、取り上げない。
- ・「見つめ直し」のように複数の教科で使われている言葉は、教科固有の意味を考えている場合、同じ言葉で表中に含めている。

例えば、社会科の見つめ直しは、歴史上の他者の生き方から自己を見つめ直すという文脈で記述されていたのに対して、理科の見つめ直しは、実験結果

と照らして自分の仮説を見つめ直すという文脈で記述されていた。

表3：各教科で育てる人間性（学生）

教科	育てる人間性
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・言語文化を継承し発展させる態度 ・他者との関係において有機的に働く言語感覚 ・伝え合う力 ・共感、感動 ・判断を伴う自己決定 ・自己の見つめ直し（言語による）
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションをとろうとする態度 ・母語以外の言語習得による言語生活の充実 ・自己肯定感 ・異文化間理解
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統文化の理解 ・祖先を敬う心 ・主体的に生きようとする態度 ・自他の願いを尊重する心 ・自己の見つめ直し ・多様な価値観の発見 ・義務を含む社会参画意識 ・多面的視野の獲得 ・公正な判断による合意形成
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の尊重 ・正確を期す態度 ・自己の見つめ直し ・挑戦意欲 ・知識の活用と発見
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・あきらめない力 ・自己決定 ・自己責任の感覚 ・自己の見つめ直し ・仮説や観察実験方法の変更に伴う謙虚さや柔軟性 ・失敗の中に価値を見いだす力
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・多様性を認める力 ・感動する心 ・想像力 ・有能感 ・安心感 ・協同感覚と充実感
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生き方を選び取る力 ・生活者としての自立 ・自己の生活の見つめ直し ・家族への思いやり ・分担と協働
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・共通目標を達成するためのコミュニケーション ・自己の見つめ直し ・挑戦する心（向上心、克己心） ・他者理解と協調性 ・社会生活における望ましい態度（協力、公正、安全）
図工	<ul style="list-style-type: none"> ・個性的個別的な自己決定、自己判断 ・多様性を理解し受容する態度 ・個性の尊重 ・想像力 ・よさや可能性への気づき（有能感） ・非言語的コミュニケーション
生活	<ul style="list-style-type: none"> ・よさや可能性に気づく力（自己の振り返り） ・人間関係を築く力 ・成長への思いや願いを高める力 ・将来への期待をもつ力 ・よりよい生活を目指す心

表 2 : 各時間のねらいと内容

配時	ねらい	内 容																						
第1時	これからの教師に求められる新しい教員像についての理解を深める。	子供の新しい学びを支えることのできる教師 ○2030年の社会と子供たちの未来 ○前回改訂の成果と次期改訂に向けた課題 ○新しい学習指導要領が目指す姿 ○子供に育成すべき資質・能力についての基本的な考え方 ○特にこれからの時代に求められる資質・能力																						
第2時	新しい教科教育観についての理解を深める。	新しい教科教育観を踏まえた授業づくり ○教科教育の直面する課題 ○教科の存立基盤 ・教育基本法第1条, 第2条 ・学校教育法第21条 ○各教科で獲得を目指すもの ・学校教育法第29条, 第30条 ・学習指導要領の目標と内容 ○教科の背景となる学問 ○新しい教科教育観 ○日本教科教育学会編『今なぜ, 教科教育なのか』に示されている各教科で育てる人間性の記述(下表)についての学生によるディスカッションと付加修正																						
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>教科</th> <th>育てる人間性</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>国語</td> <td>・自己決定 ・言語生活の向上</td> </tr> <tr> <td>英語</td> <td>・異文化間理解 ・言語生活の充実</td> </tr> <tr> <td>社会</td> <td>・市民的(公民的)資質</td> </tr> <tr> <td>算数</td> <td>・人間に内在する「数・量・形」</td> </tr> <tr> <td>理科</td> <td>・自己決定 ・自己責任 ・考え方の柔軟性 ・他者の実験結果とのかかわりによる自己の見つめ直し ・仮説や実験方法の変更に伴う謙虚さ</td> </tr> <tr> <td>音楽</td> <td>・自己存在感 ・自己有能感 ・他者受容感 ・自己決定感</td> </tr> <tr> <td>家庭</td> <td>・自分の生き方を選び取る力 ・生活者としての自立</td> </tr> <tr> <td>体育</td> <td>・社会生活における望ましい態度 ・意思決定や行動選択による実践力</td> </tr> <tr> <td>図工</td> <td>・個性的, 個別的な自己決定, 自己判断 ・多様性を理解し受容する態度</td> </tr> <tr> <td>生活</td> <td>・自分のよさや可能性に気づく力</td> </tr> </tbody> </table>	教科	育てる人間性	国語	・自己決定 ・言語生活の向上	英語	・異文化間理解 ・言語生活の充実	社会	・市民的(公民的)資質	算数	・人間に内在する「数・量・形」	理科	・自己決定 ・自己責任 ・考え方の柔軟性 ・他者の実験結果とのかかわりによる自己の見つめ直し ・仮説や実験方法の変更に伴う謙虚さ	音楽	・自己存在感 ・自己有能感 ・他者受容感 ・自己決定感	家庭	・自分の生き方を選び取る力 ・生活者としての自立	体育	・社会生活における望ましい態度 ・意思決定や行動選択による実践力	図工	・個性的, 個別的な自己決定, 自己判断 ・多様性を理解し受容する態度	生活	・自分のよさや可能性に気づく力
教科	育てる人間性																							
国語	・自己決定 ・言語生活の向上																							
英語	・異文化間理解 ・言語生活の充実																							
社会	・市民的(公民的)資質																							
算数	・人間に内在する「数・量・形」																							
理科	・自己決定 ・自己責任 ・考え方の柔軟性 ・他者の実験結果とのかかわりによる自己の見つめ直し ・仮説や実験方法の変更に伴う謙虚さ																							
音楽	・自己存在感 ・自己有能感 ・他者受容感 ・自己決定感																							
家庭	・自分の生き方を選び取る力 ・生活者としての自立																							
体育	・社会生活における望ましい態度 ・意思決定や行動選択による実践力																							
図工	・個性的, 個別的な自己決定, 自己判断 ・多様性を理解し受容する態度																							
生活	・自分のよさや可能性に気づく力																							
第3時	新しい教科教育観に基づく各教科の具体的な授業づくりについての理解を深める。	理科の授業づくりを例 ⁹⁾ にとつての説明 ～人間性を考える視点～ 個の確立に関する視点 ★自分で観察・実験を計画する意義 ★仮説と観察・実験結果が一致しなかった場合の意義 他者とのかかわりに関する視点 ★児童から複数の仮説が出される必然性と, その意義 ★仮説と観察・実験結果が一致した児童としなかった児童が, 関わることの意義 ○最終レポートの形式 1. ○○科が目指すもの (1) 教科の存立基盤 (2) 背景となる学問分野との関連 2. 育成する○○科固有の人間性 (1) ○○科固有の学び方 (2) 育てる人間性 3. 指導プラン(1と2を同時に実現する授業づくりのポイント) 一例— 第5学年 単元「ふりこの性質」																						
		<table border="1"> <tbody> <tr> <td>内容を獲得するための教師の働きかけと児童の反応</td> <td>○学びへ向かう力を育む手だて ★人間性を育成する手だて</td> </tr> <tr> <td>T: 教師 S1: 児童 T</td> <td>子供の発言や行動を捉えて, それを人間性の育成へとつなげることを意識した教師の発言や活動のさせ方を具体的に記述する。</td> </tr> </tbody> </table>	内容を獲得するための教師の働きかけと児童の反応	○学びへ向かう力を育む手だて ★人間性を育成する手だて	T: 教師 S1: 児童 T	子供の発言や行動を捉えて, それを人間性の育成へとつなげることを意識した教師の発言や活動のさせ方を具体的に記述する。																		
内容を獲得するための教師の働きかけと児童の反応	○学びへ向かう力を育む手だて ★人間性を育成する手だて																							
T: 教師 S1: 児童 T	子供の発言や行動を捉えて, それを人間性の育成へとつなげることを意識した教師の発言や活動のさせ方を具体的に記述する。																							

人間性についての学生の記述（表3）を見ると、日本教科教育学会（表2の第2時）で示されたものとは異なる内容が多数見受けられる。例えば社会科は、市民的（公的）資質と示されていたが、学生は、より具体的な言葉で表している。これらは、学生が、これまでの大学での教材研究や教育実習を通しての学びの中での体験をもとに、実感のある言葉として考え出した人間性にかかわる言葉であると思われる。授業として、具体的な指導レベルで人間性の育成が行われるためには、教師がそれを実感できる言葉で語る必要があると考える。学生が、表3に示すように、具体的な言葉を選び出してきたことは、そういった意味で評価をすることができると考えている。

(2)人間性の育成を意識した教科固有の具体的指導(指導プランより)

人間性の育成が具体的に行われるためには、授業内容の獲得を目指して、子供の学びに向かう力を引き出す工夫（普通は、このことを指導上の留意点として書く）の中で、子供の反応の中に、人間性を育成する機会を見つけ出し、教師が意図的に言葉を返したり、活動を仕組んだりすることが大切である。

例えば理科では次のような場面がよく見受けられる。

観察：振れが速いふりこ遅いふりこの観察

問題：何が原因で、振れの速さの違いが生み出されているのだろう。

児童1（仮説A）：振れ幅が原因だと思う。

児童2（仮説B）：おもりの重さが原因だと思う。

児童3（仮説C）：糸の長さが原因だと思う。

教師の整理

NG（不適切）：「どの考えが正しいか、実験で調べてみましょう。」

子供から複数の仮説が提案された意義は何であろうか。この場面を、「他者には他者の考え・経験・思いがあることを知る」という人間性育成の重要な場面と捉える教師ならば、整理の仕方が次のように変わってくるはずである。

人間性の育成を意図した教師の整理

OK（適切）：「可能性のある原因は3つありそうだね。それぞれにどのような考えや経験があるのか、もう少し聞きたいな。」

以上のように、最終レポートに学習内容を追及する中で人間性の育成を想定し、具体的な教師の働きかけと児童の反応を書くことができているものと判定をする。

表4に学生5名の最終レポートを基に判定例を示す。

表4：新しい教科教育観：その評定例

学生No.	人間性育成の具体的場面 (児童の反応と教師のかかわり)	判定
1 算数	問題：みなさんがつくった三角形を仲間分けしましょう。 T：それでは、みなさんの考えを聞かせてください S1：ぼくは、辺の長さが同じものと違もの二つに分けました。 S2：辺の長さが、二つだけ同じっていう仲間もあります。 T：素晴らしい発表です（自他の尊重） ⇒人間性の育成が不明確	×
2 国語	活動：主人公の人物像を話し合う。 教師の配慮事項 ・友達の意見に対して、何らかの反応をするようにルールを決めておく。(社会性、コミュニケーション) ・個人で考えた後に「学び合い」学習を取り入れる。(共感、自他尊重) ・友達の気づきを大切に比べて聞くことができるようにワークシートを工夫する。(他者のよさへの気づき) ・自分と異なる意見を否定せず、感じ方は人それぞれなので、受け入れるように伝える。(他者受容) ⇒具体的場面の想定ができていない ⇒教科固有の人間性の育成ではない	×
3	教科固有となっていない	×
4 社会	資料提示：終戦直後から現代までの三枚の写真 S1：どんどん変わっていく。 S2：その頃の人頑張ったんだ。 T：「みんなにも同じ力があるんじゃないかな。」(自己の見つめ直し)	○
5	No.1・2・3と同様	×

以下同様に、学生No.6～30を表5に示す。なお、この25名中17名は、想定した人間性と具体的な指導とが合致していないか、若しくは、教科固有という部分が意識されていなかった。そのため表5には入れておらず、具体的な記述ができていた8名分を記入している。

30名中9名の学生が教科固有の人間性が育成される具体的場面を想定し、教師のかかわり、児童の発言、児童同士のかかわり等を考えることができていた。また、学生が想定した場面は次のような観点のものであった。

- ・子供の不安を取り除き、活動性を誘発するような場面（学生No.12）
- ・学習の価値を生活へ一般化したい場面（学生No.9, 12, 17）
- ・児童の活動がうまくいっていない場面（学生No.18）
- ・児童が、自信をなくしたり、失敗を恐れたりするような場面（学生No.8, 9, 24, 28）
- ・児童同士の望ましいかかわりをつくり出すことが難

しいような場面（学生No.24, 28）

- ・児童の深い思いや個性が前面に出る場面（学生No.17, 22）

このように、教科内容の獲得を目指す中で上記の観点から児童の言動を具体的に想像することができた学生が、人間性を育成する授業を考えることができていると言える。

（3）「教科教育で人間性を育成する」ということに関する気づき（感想より）

感想では、多くの学生が、教科内容の獲得を目指す中で人間性を育成することについて、その重要性や可能性について触れていた。以下に、その代表的な感想を示す。

- ・教科教育の時間は、教師の具体的な働きかけや手だてによって、人間性をも培うことのできる時間になる。こんな子供に育ってほしいという願いを持ちながら、授業を考えていくことの大切さを学んだ。
- ・一つの教科でもこんなに人間性を育成することができるならば、全ての教科で人間性の育成を考えて授業を行えば、それが学級経営ということになると思った。
- ・教師が、人間性を育むチャンスに気づく目を持たなければ、子供たちは、だんだんと教師から離れていくような気がした。教師はしっかりとアンテナを張って、子供をサポートしていく必要があると思う。
- ・来年から自分が受けもつ子供たちに、どのように育ってもらいたいのか。どのような人間性を身に付けてほしいのかを考えながらレポートを作成した。しっかりとビジョンをもって、一回一回の授業を大切にしていきたい。
- ・子供たちは、授業の中で様々な感情を体験することがわかった。楽しい、嬉しい、悔しい、怖い、きつい、などを感じながら人は成長していく、それらを共有し、共感しながら、教科の授業をつくっていききたい。

このように多くの学生が、教科教育の中での人間性の育成を自分事として考えていた。

7. 全体的考察及び今後の展望

今回の教職実践演習の試みは、本学学生の授業づくりに対する「学級経営の土台の上に授業が成立する」という教科教育観を「教師は授業で勝負する」という教科教育観に転換することであった。その結果、多くの学生が、授業で勝負する教師は、教科の内容獲得と同時に児童の人間性を育成することのできる「新しい教科教育観」立っ

表5：人間性を育成する具体的場面の想定

学生No.	人間性育成の具体的場面 (児童の反応と教師のかかわり)
8 理科	問題：塩酸にアルミをとかした液を蒸発乾固させて出てきた白い粉の正体は何か S1：アルミだと思っていたけど、もとのアルミとは様子が違うのでアルミではないと思う。 S2：僕の仮説は間違っていて、白い粉は、アルミではありませんでした。 T：S2君と同じ仮説だった人、みなさん納得ですか。ちょっと話し合ってみて。 S3：もう一回実験して確かめていいですか（納得へ向けての自己決定） T：再実験の許可 T：S2, S3さん達は、白い粉が、アルミではないということを見つけたんだね。（失敗に対する価値の発見）
9 理科	上記のS2のような児童、クラス全体に対処して T：真実の追究に向けて、様々な思いを出せるところが、このクラスのいいところだね。（信頼）
12 英語	T：子供の表現や活動に対して“Good job!” “Nice try!”などの褒めたり、励ましたりする言葉を常に意識して行う。（積極性、自己肯定感）
17 音楽	活動：リズムに合わせて音をつくる。 S1：緊張するな。 S2：面白い音だな。 S3：そういうのもあるんだ。 S4：同じ音の人がいない。不思議。 T：いろんな音があって楽しいね。ふだんの生活や学習も同じかな。（多様性を認める力、豊かな心）
18 音楽	活動：「ゆかいな時計」の鑑賞 T：S5さんは、何が浮かびましたか。 S5：何も浮かびません。 T：S1～S4さんを参考にして、もう一度聞いてみようか。 S5：空の中を泳いでいるみたい。（有能感、安心感）
22 図工	活動：「飛び出すカード」の制作 C1：お母さんは、ハートが好きなんです。紙以外の材料を持って来ていいですか。 T：どんなものを使いたいですか。 C1：フェルトが使いたいです。 C2：リボンが使えると思います。 T：いいですね。ぜひ持って来てください。素敵なカードになりそうですね。（承認による個性的な自己決定・判断）
24 体育	活動：「タグラグビー」の振り返り S1：今日は勝ったけど、ルールのこと、注意されたから、今度は、ルールの注意は受けないようにしたい。 (社会生活における望ましい態度：公正) S2：今日は逃げてばかりだったので、次こそはタグをとりたい。（挑戦意欲） S3：どうして、タグが取れないのか。僕には無理なのか。 SS：S3君、横動きの練習を一緒にやろうよ。（共通目標達成のコミュニケーション） T：いい振り返りができていますね。みんなの力がどんどん伸びてきています。次のゲームが楽しみです。（向上心）

28 生 活	活動：一年間の成長の発表を聞き，良かったところを伝えあう。
	S 1：僕には「褒めカード」が少ない。
	S 2：だって，声が小さくて，よくわかんなかった。
	T：S 1さんは，どんな様子で発表してた？
	S 3：みんなの方を見て，一生懸命だった。
	T：S 1君は発表で，1年間で苦労したことを言ってくれていたよね。
S 4：かけざんの練習頑張ったと思います。（よさに目を向け人間関係を築く力）	

た教師であることに気づいていった。しかし，表4，表5に見るように，具体的にそのような関わりの場面を想定することができた学生は三分の一程度であった。

学生の教科教育観が，一朝一夕にベテラン教師のような教科教育観に変わることは難しいが，教職課程の最後の授業にあたって，この試みを続ける意義は大きいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 「教育課程企画特別部会論点整理（案）」文部科学省国立教育政策研究所2015年8月20日
- 2) 「小学校学習指導要領解説理科編」文部省 1999年5月
- 3) 『今なぜ，教科教育なのか』日本教科教育学会編 2015年8月 文溪堂
- 4) 『なぜ，理科を教えるのか』角屋重樹 2013年6月 文溪堂